

会 議 録

令和元年8月23日作成

会議名	第2回木更津市民会館整備検討委員会		
開催日	令和元年8月7日(水)	場 所	駅前庁舎8階 防災室・会議室
時 間	午後2時00分～午後4時30分		
出席者	委員：倉田直道委員、古橋祐委員、伊藤裕夫委員、松井憲太郎委員 宮崎恵子委員、石村比呂美委員、土居和幸委員、地曳文利委員 渡部史朗委員、岩埜伸二委員 事務局：総務部 伊藤次長 総務課) 曾田総務課長、安田副主幹、河名主任主事 管財課) 勝畑参事兼課長、平本主幹、加藤主査 教育部 文化課) 稲木参事兼課長 (株)シアターワークショップ 伊藤代表取締役、佐藤氏、古川氏、伊藤氏 【木更津市中規模ホール整備基本計画策定業務受託者】		
議 題	1 基本構想について 2 市民ワークショップ結果について 3 導入機能・施設構成について 4 既存中ホールについて		
公開・非公開の別	議題1～4 公開		
傍聴者数	1人		
配付資料	○会議次第 ○木更津市民会館整備検討委員会委員名簿 ○資料1 第1回委員会議事内容の確認 ○資料2 基本構想について ○資料3 市民ワークショップ結果 ○資料4 導入機能・施設構成について ○資料5 既存中ホールについて		
会議概要	別紙のとおり		

○司会

本日はお忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございます。

初めに、配布資料の確認をお願いいたします。

配布資料につきましては、委員会の次第の裏面に記載がございます。

【配布資料確認】

なお、本日の会議は公開で行います。

会議の傍聴希望される方がおりますので、ここで傍聴人の方に入ってください。

【傍聴人入場】

ただいまから第2回木更津市民会館整備検討委員会を開催させていただきます。

ではまず、会議の定足数についてご報告させていただきます。

附属機関設置条例第六条第2項の規定によりまして、会議は委員の半数以上の出席がなければ開くことができないとなっておりますが、本日10名全員の出席をいただいておりますので、委員会は成立することを報告させていただきます。

なお、本日の委員会につきましては、会議録作成のため会議内容を録音させていただきますのであらかじめご了承くださいませようお願いします。

また、発言の際は、お手元のマイクのボタンを押し、発言後は、もう一度、マイクのボタンをオフにさせていただきますようお願いいたします。

それでは初めに倉田委員長よりご挨拶をいただきたいと思ひます。

倉田委員長お願いいたします。

○倉田委員長

皆さんこんにちは。

前回の会議は、顔合わせというような形でありましたが、今回はある程度踏み込んだ議論をしていただくことになると思ひますので、ぜひ皆さん、議論の方、よろしくお願ひいたします。

○司会

倉田委員長ありがとうございます。

では議事に入る前に、前回の委員会の議事内容を確認いたします。

○事務局

【資料に基づき前回の議事内容を説明】

○司会

ご意見・ご質問等ございますか。

【発言する者なし】

○司会

よろしいですか。それでは議事に入りたいと思ひます。

附属機関設置条例第6条第1項に、委員長が会議の議長となるとありますので、ここからの議事進行につきましては、倉田委員長にお願いしたいと思ひます。

倉田委員長、議長席へお願いいたします。

【倉田委員長議長席へ移動】

○倉田委員長

それでは議事に入りたいと思ひますが、発言される場合には挙手をお願いします。

本日の議題は4件となっておりますが、個々の案件ごとに説明と質疑を行う形で進めさせていただきます。

それでは議題1、「基本構想について」を議題といたします。

内容につきまして、事務局よりご説明願ひます。

○事務局

議題1及び以降の議題につきましては、シアターワークショップよりご説明させていただきますので、よろしくお願ひいたします。

○シアターワークショップ

【資料に基づき「議題1基本構想について」を説明】

○倉田委員長

ありがとうございます。

ただいま事務局より、「基本構想について」木更津市の概況も含めご説明いただきました。何かご質問、ご意見ございましたらよろしくお願ひいたします。

○松井委員

木更津市概要について、人口の推移や人口動態を詳しく説明していただきましたが、基本的には人口が増えていて、それは、旧来の住民の人たちの自然増ではなく、いろんなところから、新しい人た

ちが入ってきているということだと理解してよろしいですか。

今、私が仕事をしている埼玉県富士見市は、町の時代の昭和 31 年には 1 万人ぐらいでしたが、現在 11 万人で、古い住民の人口はほとんど変わりませんが、新しい住民がたくさん転入してきました。

ちなみに 1970 年代には人口増の割合が、全国 2 位でした。

そのため、農地の中に、新しい住宅地が歯抜けのようにできた町となり、その結果、富士見市の共有した文化を持っているという状態とはかなりかけ離れてしまいました。

木更津市の場合は、富士見市ほど極端に人口が増えているということではないのかもしれませんが、最近の動向などから、旧来住まれていた方とライフスタイルや価値感などが違う新しい住民の方々が増えているというように思えますが、実際、そのような感じはあるのでしょうか。

この市民会館を造ることで、市民の人たちが集まり、郷土の価値を共有したり、魅力を再発見したりというようなことをめざしているわけですが、そこに向かうには様々な戦略が必要だと思います。

新しい住民の方々と従来の住民の方々が、一緒に何かをやっていくには、いくつかの越えなければならぬハードルがあると思ひ、この現実も認識した上で、この計画をさらに実現に向けて動いていったほうがいいと思ひます。

特に行政の方々に、この市の課題を、富士見市ほどではないかもしれませんが、伺わせていただければ参考になります。

○事務局

ただ今のご質問のお答えになるかどうかはわかりませんが、今人口が増えている地域は、アクアラインの着岸地の金田地区、また請西東、請西南地区などといった区画整理事業を行ったところですよ。

転入してきていただいた方の多くは、一戸建ての住宅を建てた若いファミリー世代であると認識しております。

そのような方々につきましては、お子様や友人を介して地域の祭りに出るなどの状況があるのではと思っております。

また、木更津市の取り組みの一つとして、市の一大イベントとなっている港まつりがあり、その中で「やっさいもっさい」という踊りのイベントがあります。

これは地域の方々が繋がりを持つようなイベントで、このような形で、市としては新旧住民の交流を図っている状況ですよ。

委員がご心配いただいているような、新旧の住民の交流がないという状況ではないのではと思っております。

また、人口につきましては、社会増でございます。

○松井委員

旧来の住民の方々が住んでいる中心市街地と呼ばれるものがあるのかどうかわからないのですが、そこが、人口減となり、空洞化している状況はありますか。

○事務局

人口が減っているのは、山間の農村部などと認識しております。

○伊藤委員

今のお話と関連しますが、現在のデータからは、ホールの利用者は、文化団体、公共団体関係また学校関係が多いようですよ。

文化団体については、送っていただいた資料では、こういう言い方をすると語弊がありますが旧住民の方が中心ではないかと思ひます。

おそらく、新住民の方は、アクアラインを通じ、東京や神奈川の方との繋がりも深く、木更津で文化活動をされているという印象が持てません。

しかし、今後、木更津の文化を造っていくためには、そういった新住民の方と、それが昔からの住民の方たちの、まさに理念にありますけど、交流ということが、大きなポイントになってくると思うのですが、ホールをやっぱり、一番、今まで利用されてきた方はどちらかっていうと、旧住民の方が多いのではないかと思ひますが、今後、新住民の方にも利用してもらい、旧住民の方と交流していくための戦略のようなものが、あまり感じられません。

新たに中規模ホールを作っていく場合の一番大きなミッションは、多分その辺に絞ったほうがい

いのではないかと思います。

現状では、その場しのぎの感じがしてならないので、その辺を含めて、新旧住民の交流についての議論が必要ではないかと思います。

文化団体アンケートに関してですが、平均年齢についての記載はありますが、どの年代の人がどういう意見を言っているかわかりません。

新住民の中心である小さなお子さんを持っている若いファミリー層の人たちが、5年後、10年後のホール利用者になれば、非常にいい形になるのではないかと思います、その方々がそっぽを向いてしまうと、せっかくお金をかけて作っても、非常に無駄になってしまいます。

この辺をもう少し詳しく伺いたいと思います。

○土居委員

木更津市の人口は、年間約千人ずつ増えています、古い地区から新しい新興住宅街に移動している人が多いのではと思います。それは、2千～4千人の規模の住宅街ができている割には人口が増えていないからです。

また、新旧の住民の文化活動という面では、昭和62年ぐらいまでに、全ての公民館の設置が終わっています。なお、公民館が設置されているのは、主に旧地区になります。

しかしながら、平成になってから造成を始めた地区には、公民館が無い、新しい住民の文化芸術活動が行われていないという実態があるのではないかと考えています。

○古橋委員

色々な情報や市民の方々からの意見を取り入れた結果、構想が出きたのはよくわかるのですが、この施設が木更津市の中でどういう位置付けにあり、公民館との関係も含めて、何をやっていくのかなどのビジョンや施設運営について、今の段階で考えていかななくてはいけないと思っております。

そのあたりの木更津市としてのビジョンというのは何かお持ちなのでしょうか。

○事務局

まず公民館との関係ですが、公民館は現在、中学校区ごとにありますが、先ほど土居委員よりお話があったとおり、新興住宅街には建っておりません。

各地区の公民館は全部で16館ありますが、その地区公民館を束ねるたち形で中央公民館がございます。

今後、皆様方に複合施設などについても検討していただく中で、中央公民館的な役割も新たな市民会館で担うということも考えられるのではと考えております。

また、運営方針でございますが、現在、市では指定管理者制度を多くの施設で導入しておりますが、その制度のみならず、民間の力を借りて、よりよい方向で運営していくのが、適切ではないかと考えております。

○伊藤委員

本日の資料の中で、文化団体の活動についてのアンケート分析では、日常活動で重視することと発表場所で重視することを分けられています。

おそらく日常活動というのは、公民館をベースにやっている活動が中心で、発表や展示となると、市民会館で行われていると思います。

公民館活動で日常的なものをやりつつ、他方で年に1回か2回の発表をきちんとやっていきたい。

或いは刺激を受けるために、いいものを見て鑑賞して、質を上げていきたいというような形での市民会館としての役割分担というものがあるのではないかと考えていますので、中央公民館とは若干役割が違うのではないかと気がします。

その辺は立体的に戦略を組み立てていく必要があると思っております、理念上、このホールがどのようなミッションを担っているかをある程度考えておかないと、評価点検していく時の基準が作れません。

どれだけ人が利用したかというような数量的評価ではなく、定性的な評価をきちんとしていくためには、何を目標にしているかが明確でないとならないと考えます。

そういう意味でも、計画の中で、基本になっている部分をもう少し絞ったほうがいいのかと思っております。

○松井委員

おそらく、私が人口のことを聞き始めてからの、伊藤委員のお話、古橋委員のお話は、皆同じポイントをちょっと違った角度から言っていると思います。

今、伊藤委員、古橋委員がおっしゃったことをちょっと違った角度から言えば、文化協会の方々、現在、公民館またかつて大ホールなどを利用して、文化活動やられているの方々、また新住民の方たちではないかもしれないような文化活動団体に対して、これまでの活動を維持発展させていくための新しい中規模ホールや文化施設の機能を提供しなくてはならないことは、まず基本です。

そのことは、ここにいる皆さんが理解していると思います。

しかし、基本計画の理念に述べられているような、従来の木更津が文化資源として持っている様々なものをさらに有効活用するためには、新しい施設機能のどこに中軸を定めるかということ、また新しい文化芸術の鑑賞機会或いは体験機会みたいなものをどういうふうに作っていかうとしているのかなどを考えて行く必要があると思います。

最初に言った、従来の方々の活動を絶対的に支えて行かなくてはならないということは、基本命題としてあると思いますが、そのあとの方の焦点の絞り方が、3人とも少し見えづらいです。

基本構想の中にはそういうことが謳われていますが、前回も、私は指摘させていただきましたが、理念から導き出されている必要な機能がぶつ切りで、それが理念で語られている目標とされている大きなビジョンとどう繋がっていくのか、或いはその機能が有機的にリンクして、その理念をどう実現するのかというところが、まだ描かれていないのではないかと思います。

そこで、お二人が指摘されたように、やはりその新しい施設の経営目標、フォーカスということをもう少し明確にしたほうが、議論が深めやすくなるのではと思います。

○石村委員

私は木更津市民の皆さんは、市民力が結構高いなというのが実感です。

コミュニティーFMをやっていて、こういうふうに団体を立ち上げたイベントをやりたい、こんなことを私たちは考えているという人たちが大変多い地域だと私は感じています。

先ほど事務局から1中学校区に一つの公民館というお話がありましたが、その公民館の活動が、色々なことでベースになって、時としてその中規模ホールと関連していくのかなと私は思いました。

今、公民館の活動も高齢化が進んでいまして、若い人たちをどんなふうに取り入れたらいいだろうかということも今、議題の一つには上がっていますが、公民館で日々いろんな活動していて、次にその時より大きな何かをしようかという場所が私は中規模ホールなのかと、簡単に思っていました。

先ほど、中央公民館を中規模ホールの中に入れるという案もあるのかと、実は今日新たにした次第です。

活動している皆さんは、それぞれ、その地域を思い、活発に活動されていると思っておりますし、また新旧住民の話が出ましたが、金田の新しいコミュニティーセンターなども新住民の方々が結構訪れており、子育て世代の方々もいらっしゃいます。

金田の旧公民館の時代も新しい住民のお母さんたちが訪れて、一緒にコーヒーショップをやったりしていました。

ですので、その中規模ホールの大きな役割として、公民館との連携を考えて行くと、いいホールの形ができ上がるのかもしれないとおぼろげながら思いました。

○宮崎委員

私は木更津市の文化協会の方に関わっているのですが、確かに、おっしゃられた通りの高齢化が進んでいます。

何とか若い人達に入って欲しいなと思い、いろいろな人達に声をかけていますが、今の若い人たちが何をやりたいのかというところが私にはちょっとわからなくて、箱物を造れば人が来るということではないと思います。

私は、公民館と中規模ホールの使い方はやはり別だと思います。

ですので、公民館で活動しているからその人達がホールを使うかということ、そういうものでもないと思います。

要するに費用の問題もありますし、趣味でやっている人たちはそこで踊ればいいいわけです。

大勢の人に見て欲しいからやっている訳ではなく、文化協会としては今中ホールを使って、そういったサークルの方たちを集めて舞台を作っていますが、だからといって自分たちだけ、数人の人たちだけで舞台を作ろうかというようなエネルギーは無いです。

なので、そういう人たちには、その人なりのあり方があると思いますし、そうじゃない形のもっと別のものもあると思います。

今、文化協会は「民舞」の方が多くいらっしやいます。

そうすると、おっしゃる通りで年代が上がっています。

若い方がそこに入っているかということ、あまり入っていないみたいで、このままでは、やがて、なくなってしまう可能性もあります。そういう団体さんが多いです。

ですので、そうではなくて、もっとどこかで勉強してきた人たちが、市の中心になって何か立ち上げてくれないかなと、今も思っています。

そういう人たちに向けて、ホールができたから何かやろうよというイベントを、例えば市が委託したところが会館を持ったとすれば、その会館の方が主催で行うと言ったら出てくるかもしれません。

それは新住民とか旧住民とかいう問題ではないと思います。

木更津で生まれ育った子にしても、他の場所に行って活動をしている人たちはいる訳ですので。

そういう人たちを何とか木更津の方に引っ張ってこられるような、そういう作りや場所がなくてはならないと思っています。

だから、本当にそういう企画をできる人がいる会館を作って欲しいというように思っています。

○松井委員

石村さんがおっしゃったような各地域の可能性はあると思います。

実際に富士見市も、ここに比べれば小さい街ですが、各地域に公民館やコミュニティーセンターがあり、そこでは、それに応じた層の市民の人たちが活動されています。

公民館はやはり、70年代を中心に、社会教育活動が根強い行政職員などによってかなり進められました。そういう年代の人たちがいまだにまだ第一線で頑張っている。

ですので、80代ぐらいが現在の中心だと思いますが、もう、いずれにしろ、終わりを迎えていくのは避けられない時代だっているという認識があります。

コミュニティーセンターの方は、社会教育活動みたいなものと少し違った形でやられているのですが、ある人がいれば、何か動きはあるのですが、人がいなければなかなか難しいということがあり、おっしゃっているのは本当によくわかります。

それで、こんな差し出がましい事を言うべきかどうか、ちょっと迷っていたのですが、富士見市の文化会館で、さっき言ったような富士見市のバラバラな状況の中で、新旧住民の人たちが一緒に何かをやるようなイベントを行うプログラムを作っておりまして、もし10～15分程度の時間がありましたら、次回に一つの例として紹介させていただけないかなと思っています。

何かの参考になればと思いますので、ご検討ください。

宮崎委員がおっしゃったように、例えば富士見市の中核の公民館でも70代80代の方々が先頭を切って地域の文化活動を支えてきましたが、その方々が作り出すプログラムに多くの市民が参加するという仕組みにはできません。

やはり、自分たちの活動を一生懸命いいものにしていくことに専念されていて、そういう意味で非常に地域の文化の発展ということには貢献されていますが、地域の活性化に向けていくためには、外部からの観点や専門的なノウハウが必要です。市民という立場から少し離れた部外者のような立場でコーディネートしていくような役割や人材も必要になってきます。

先ほど、お二人が言っているように、まだ運営組織の話は先だと思のですが、基本理念に導かれた新しい施設の事業展開の軸のようなものを定め、その上でプログラムを展開できるような組織のありようや、それに基づいた施設の全体構成のあり方などを考えていくというのは、今すごく重要なことだと思います。

○渡部委員

市のまちづくりの観点からお話をさせていただくと、人口は増えていますが、中心市街地である駅の周りは人が減っています。

新しいホールを作るからには、駅からその周辺の回遊性を持たせるためにも、地元の人たちが活動していく場としてだけでなく、人を呼び込む施設となって欲しいと思います。

今アンケートの中では、用事がなければ市民会館に行かないという方々が多いので、その方々に来てもらうような施設を作っていきたいというところの、委員の方々がおっしゃったようなコンセプトを市で作っていく必要があるのかと思います。

○倉田委員長

今色々ご発言されていることは、ある意味で、今日この後議論する導入機能や施設構成についての前提になる議論をされているのかなと思っております。

やはり基本理念のところにある、芸術文化活動の促進や芸術文化に触れる機会の提供というところだけでは、基本的には従来の市民会館のあり方の延長での市民会館像でしかないというふうに思います。

それに対して今日、松井委員が最初に口火を切られた話にも関連するのですが、やはりもう一つのキーワードとしては交流というのが非常に大事なのではないかと。

これは、公共施設に求められている大事な役割で、別な言い方をすると、最近では居場所というような言い方もしていますが、市民にとっては、その居場所というものが、街の中でどんどんなくなってきています。そういう意味で言うと、やはり今回の市民会館については、そういう視点からの議論も必要ではないかと思います。

居場所ということは、言ってみれば、多世代や、新住民、旧住民たちの交流の場でもあります。それは今、公共施設に求められている大事な役割ではないかと思っています。

特にまちづくりをやっていると非常にそのことを実感します。

そういう意味では、ホールにどういう機能を絡めて複合化していくかということも非常に大事な議論で、ここが居場所にならないといけないと思います。

そういったときに、ただ純粹に鑑賞だけをするためのホールというのは、その催し物に関心がなければ、或いは演者でなければ、足を運ばないっていう状況になります。

そこを交流の場にするためにはということを考えたときに、もう少し新しい市民会館の姿というのが見えてくるのではないかなと思いますので、そういう意味では、その辺の議論をしていただくことが非常に大事ではないかなと思っています。

それは運営にも関係することだとも思いますし、とにかく箱の議論はしますが、やはりそれを誰がどういうふうに利用するかという利用する側の議論を行わないと意味がないのではないかなと思っています。

おそらく今申し上げましたようなことが、この後議論していただく導入機能や施設構成に繋がっていくところだと思いますので、そこで少し踏み込んだ議論をしていただければいいのではないかなと思います。

ということで、次の議題、「市民ワークショップの結果について」に移っていただいてよろしいですか。

【委員より「はい」との声あり】

○シアターワークショップ

【資料に基づき議題2.「市民ワークショップ結果について」、

議題3.「導入機能・施設構成について」を続けて説明】

○倉田委員長

それでは、今、ご説明いただいた「市民ワークショップ結果について」と「導入機能・施設構成について」、あくまでもこれは議論のたたき台ということで、先ほどの議論を踏まえて、ぜひご議論いただければと思います。

また今日ここで全部を固めてしまうということではなく、この時点で議論しておかなければいけないことは、きっちり議論していただいた方がいいと思いますので、ぜひご意見いただければと思います。

おそらく先ほどの議論は、導入機能とか施設構成に繋がってくるものではないかなというふうに思います。

今日、ご紹介したのは、かなり一般的な組み合わせでもあり、もちろん基本構想段階でいろいろ議論されたことであると思いますが、木更津市に必要な市民会館を作るということで、ぜひ議論をいただければと思います。

○石村委員

今施設の話がいろいろ出てきたところですが、お隣にある君津市民文化ホールについて少し話をさせていただきます。

私は、その委員を現在やっていますが、大ホールが 1200 席、中ホールが 500 席あります。

しかし、先般、宮崎委員もおっしゃっていましたが、なかなか予約が取りにくい状況です。

なぜそんなに人気があるかというと、木更津の大ホールがなくなったからということもあると思いますが、施設もそこそこで、いいと思うのですが、一番いいのは、スタッフだと思います。

よくあるホール付きの音響さんなどは、すごく高飛車でなかなか素人さんが寄り添えないような雰囲気を出しているのですが、君津市民文化ホールの音響さんは、舞台監督もやってくれるし、音響や照明についても素人さんに寄り添ってくださるので、すごく使い勝手がいいホールだなというのを感じています。

ですから、施設の充実もすごく大切なことではあると思うのですが、そこに入ってくるソフトというところも、やはり大きな要因なのかなというふうに思っています。

先ほど事務局の方が指定管理になる可能性のこともおっしゃっておられましたが、そういう方々が、素人がすごく使いやすいホールや敷居が高くないようなホールにしてくださると、多くの方が利用してくださると思います。

ですので、施設の規模や施設の内容はもちろんですが、そのあたりの充実もあわせて考えていただければ、多くの方々に利用していただけるのではないかと思います。

○松井委員

15 ページにある基本理念に、木更津文化を継承、創造、振興する、にぎわい交流拠点という記載があり、先ほど委員長はその交流ということが非常に重要で、それは居場所であるというようにおっしゃられたかと思いますが、ベースにあるのは、ソーシャルキャピタルということで、日本語で訳すと社会資本とか社会関係と言います。それは何かというと、その人間が、自立しながら社会の一員として生きる上で必要な社会における関係性を形成していくための資源ということになります。

それは、例えば経済活動からも生まれてきますが、地域の中のコミュニティーで育まれた文化とかその辺の人間関係の中で、人としてどういうものを自身が活用、発見して生きていくか、その人に対してどのような思いを持って一緒に生きていくことができるかみたいなノウハウを学ぶことから生まれるものだと思います。

今はもう、少し悲観的に見て、そういうことを文化施設が担わないと、もはや地域共同体が成り立たないというような考え方であると思います。

なので、委員長が言った居場所というのに、これをどういうふうにして具体的に近づけていくかということが、やはり基本ではないかというふうに思います。

そこで、堅い言葉で言えば社会関係資本みたいなものを、そこに来た人達が培っていくということだと思いますし、逆に木更津市が、そういうものを、地域として育てていくような感じだと思います。

なので、部門というふうにしていくつかに分けられているのは、これはこういうものが入るだろうという最終的な結論はあると思いますが、このそれぞれの部門が一つの有機体として相関関係を持つことができるような居場所になるという、横の繋がりというか、有機体性みたいなものを持たせるのをどうするかというのが、重要であり、先ほど委員長が指摘したような肝になる部分だと思います。

ただ、ちょっと批判的な言い方になってしまいますが、このようなものほどこの施設にもあり、資料の中で例に挙げたような、市民ワークショップで事例を提出してくれたようなところはひよっとしたら上手く機能している部分なのかもしれません。

今の議論の中では、この施設が市民の交流を通じて、新しい地域文化を創造していくみたいな、そういう中核の機能までを含んでいると思えないです。

なので、何も結論がないまま話していて恐縮ですが、このそれぞれの部門をつないで、その広場な

いしは居場所のような形の機能をどうやって生み出すかというのが出発点かなというふうに思っています。

○古橋委員

私は、このホールやそれぞれの部門の規模としては、どれも間違っていないと思っています。

今、松井委員が言われたように、この中でやっぱり突出してみるとホールなのですが、先ほどちょっと君津市の話もあったのですが、ホールはどうしてもやはり中核にならざるを得ないものです。

前回の時にご質問させていただいて、何で 700 人だという話になった時に、成人式を行えるという話もあり、それも一理ある話だと思います。

そうするとこのホール部分の 700 席がどういうふうに使われるかと言う話の中では、この地域において 700 席で毎日一流の世界的なアーティストが来て演奏会をやるというのは、はっきり言ってあり得ないです。

すると、当然ながら地域の方々が使うようにしていかなくてはいけない。

木更津の若い人達は、例えば幕張に行ったり、或いはひたちなかのフェス系な場所に行ったりすると思います。

そういう中で、将来は武道館に行きたい、ドームに立ちたいと思われる人たちは、このホールが公民館やここでの創造活動部門からステップしたときの、少なくともこの木更津での到達点というように、あのステージに立ってみたい、またそこに一流の方々がいらっしやったとすれば、あの人達が立った舞台の上に僕たちも立ちたいというようなブランディングが必要なのだと思います。

なので、ホールとして、700 席が本当に適切かということとはちょっとわかりませんが、一般の人たち、ここに住む人達の目標にならないと多分生きてこないのではないかと考えています。

そのためにはある意味で、実は今、倉田委員長や松井委員が言われたように、他の交流部門であったりとかの連携というか、もしかしたら空間的な連携だったりするのかもしれないですけども、繋がりをもっと考えていかないといけないと思います。

木更津の中核のホールにならざるを得ないわけですから、その時にこの施設の中でどうやってそれが機能していくのかということを考える必要があります、ある意味教科書的な 700 人のホールを作っても活かせないのではないかというような心配を持っています。

ただ、ハードウェア的には全然間違っているとは思ってなく、当然ながらこういう形になるんですが、そこにもうひと工夫ないと、結局、造って終わってしまうということが少し怖いと感じています。

○伊藤委員

先ほどの説明を聞いていて、この新しいホールをどういう人たちが使うのかなあというのがずっと頭の中にあります。

例えば一般的なホールで言いますと、鑑賞型であれば、プロの芸術家たちのすばらしい公演を市民たちが見に行くという形で、今は君津市のホールで、かなりそれを担っているのではないかなと感じますので、ちょっとそうじゃないのかなという気がします。

700 席はかなり立派なホールになってきますので、こういったホールを使っていくということに関して言うと、やはり運営のイメージがはっきりしないときついかなと思います。

ホールの運営者にかなりしっかりした人、指定管理でもどちらでもいいと思うのですが、本当に専門的なそういう見識のある人がホールの運営に関わってくれば、例えば主催事業だとか様々な工夫をして、700 席のホールに見合った木更津の文化を発展させる企画ができるだろうと。

しかし、そうではなく、貸し館でいくならば、今までの団体利用的なものの延長を超えることは結構難しいのかなという感じがします。

そういう話を考えつつ、私自身はもうホールよりは、先ほど松井委員が言われたように、機能よりもむしろ、この新しい施設が、木更津のまちづくりのコアになってくるような社会関係資本みたいなものを目指していく形になっていくためには、多分ここで言うところの部門のあり方である創造部門や或いは交流部門のようなものをもっと強化していく必要の方が遥かにプラスになるのではないかなと思います。

つまりホールの部門に関して言えば、私としては、あまりそこに力を入れるのなら、本来は力を入

れて欲しいのですが、そこまでの決意がないのであれば、お金もかかることですので、むしろその創造部門と交流部門の方をうまく有機的に活用させていった方がよいと思います。

その時にはホールに閉じこもってはいけません。

街中に広がっていくという形ですと、例えば中心市街地活性化として、商店街等の連携だとか、或いは空き店舗との連携などを行うことによって、面にしなければならぬと思います。

点、拠点としてのホールではなくて、それを含めた面を構成するようなホールにしていかなければならぬと思っていますが、そのようなことを考えたほうがいいのかと思います。

この辺はやはり基本方針に関わる場所です。

このホールがどういった役割を果たしていくのかということについて、いいホールを作っていくという形で行くのか、或いはホールを超えた新しい文化機能を作るという形で行くのか、この辺を最初に固めたほうがいいのかと感じています。

○松井委員

お二人の話から、少し自分なりに話が整理されたかなという部分がありますが、それに絡めて、宮崎委員と石村委員が先ほど地域の公民館とか団体の活動に触れていたことに少しつながられるかなというふうに思いましたが、私が先ほど言ったその交流部門が軸であるという話とは少し変わってしまうように思います。

交流部門である様々な活動プログラムと創造活動部門である様々なプログラムは、おそらく、地域の公民館やコミュニティーセンターで活動されているような市民が、少しステップアップするようなもの、或いは地域でやっている活動をそのまま持ってくるような形のもので、この新しくできる市民会館で日常的に行われている様々な活動となり、それに同期するような形で多目的ホールがあり、その日常の活動が発表機能に繋がっていくような流れとして、一段飛躍したような形でメインホールがあるのではと考えます。

このメインホールは、1年間がかりの活動の成果、或いは数年間分の活動の成果を発表する舞台として、ブランドにもなり、近隣の町を含めた色々な人達が使いたくなるような施設となると考えます。

そうすると、全体の構成としては、ただ単に横に並んでいるというより、縦になるような形で、開かれた裾野がまずあり、そこから色々なものが流れ込んできて上にあがっていくような、そういう整理の仕方もあり得ると思います。

また、先ほど踊りの話がありましたが、その踊りについて、少し説明してください。

○事務局

8月14～15日に港まつりがあり、その中で8月14日に行われている、木更津版の阿波踊りなどと言われているやっさいもっさい踊りがあります。確か昭和40年代の終わり頃から始まっていると思いますが、新旧住民の交流ということで、当時の青年会議所の方々が中心となって始まった踊りで、それが時代を経て、現在は実行委員会形式でやっております。

○松井委員

杉並区の高円寺にある文化施設でも、その建物自体は阿波踊りを上演するわけではないですが、阿波踊り専用のようなホールがあり、それが現在どこまで有効活用されているかわかりませんが、これも一つの文化資源だと思います。

それで先ほどの話で言えば、新しく住まれた方も昔からの方も一緒にやれるような何かがあるということであれば、そういうものに市民会館が何らかの機会を提供していく、或いは逆に、そちらから色々な材料をいただきながら、縦の構造の中で、創造活動や交流を行っていくのではと思います。

○土居委員

基本構想では、それぞれ必要なもの、ハードに近いものばかりが議論されていたので、今回のワークショップでは、やりたいことが何なのかを検討してほしい。

これまでは行政が箱を作り、はい活動してくださいだったのですが、各世代の市民がこういうことをやりたいので、こういう場所が欲しいというのをワークショップの中でしっかりとらえてもらいたいと思います。

交流スペースや創造部門といったところでも、先ほどからお話をいただいている通り、有機的に繋がらないといけないと思います。

また、この部屋では何を行ってというのを市が期待する訳ではなく、何のためにこういう場所が必要であるということをしっかり考えながら作る必要があり、もう今は公民館を作ったので活動してくださいという時代ではないのだと思います。

ワークショップの全4回の中で、それぞれの部門の構成や、どういうふうそこから発信をしていくかなどをしっかり考えて欲しいです。部屋の名前にこだわらず、創造部門と交流部門が一つになったものでも全然構わないと思います。

公民館の機能をこちらに持ってくるっていうのも一つの案かもしれませんが、そういう、中規模ホールが発信、活動の場になって欲しいというのが、市としての意見です。

○事務局

今、ワークショップの話がありましたが、第1回目は終了し、今後3回行う予定ですが、8月9日の金曜日に、急遽、地元の高校生でワークショップを行う予定であります。

若い世代の方が、どういうふうなことを望んでいるかという意見をいただき、その結果を本検討委員会でご報告させていただきますので、また様々に議論していただければと思います。

○地曳委員

市民部としては、金田地域のアクアラインの接岸地に地域交流センターという建物をこの4月にオープンしました。

今までの公民館を廃止し、三階建てのホール、会議室、イベントスペースなどを作りましたが、この地区は、新しい子育て世代がかなり増えていまして、この間イベント等があったときには、100人ぐらいのママさんとその子供たちが来ておりました。そういう意味でこういう交流の場所というのは非常に必要だと実感していますが、そういったママさんたちがすぐ700人のホールを埋めるだけの催しまでたどり着くには相当な時間がかかるので、そこはしっかりとコミュニティ形成を深めて行く必要があると思います。

先ほど松井委員がおっしゃっておられたように、交流部門からスタートして最終的にホールで何か催しをするまで進んでいくような、そういった施設になっていけばいいのではないかと思います。

○岩埜委員

公民館を所管している教育部としては、メインホールでは県警のコンサートや大きなイベント、また成人式を行い、多目的ホールについては、公民館で行っている様々なサークル活動の成果発表を行えればと思います。

なお、公民館は、現在、13中学校区に16箇所あり、1中学校区で2箇所あるところもございますが、先ほど石村委員がおっしゃったとおり、本当に市民力がございます。

各文化祭に毎年行くのですが、相当の力を持っております。

色々なサークル活動をやっておられる方からは、ぜひ発表する場をということを伺っております。

また、公民館では、先ほど金田の事例にもあったように、今まちづくり協議会を何ヶ所かつくっております。

現在その協議会は高齢者層が引っ張っていますが、公民館としては、中間層で引っ張っていただける方を増やしたいと考えています。それは、自助や共助という市の目的にも繋がっていくことにもなり、公民館としてはその辺の活動を進めております。

このように、木更津についてはまちづくり協議会も含めてまとまりがある地域ですので、公民館活動などの発表の場としてホールを使っていければというように考えます。

○松井委員

現在、活動されている様々な市民の文化だけではなく、もう少し衣食住みたいところまで文化を広げれば、様々な活動があるかと思えます。

そういうものが現在、公民館でやられていれば、それを提案、交流するような形で、招き入れたりできれば非常にいいかなと思えます。

それを発表の方向に向かって、高めていければと思えますが、それには先ほど来、古橋委員からも出ているような運営組織のことがやはり重要になるかと思えます。

今はハードのことを話しているのですが、ハードのことを話しているというよりはそのハードの中で何が行われるかという、言葉を変えれば、プログラムのことを話している訳です。

活動をコーディネートする部分、それは、今、ワークショップという言葉として流通していますが、ワークショップの活動形式が、なぜ今の世の中に必要とされるようになってきたかという点、例えば公民館の活動の例を挙げると、公民館の中では、例えば、利用団体協議会みたいなものがあり、それぞれの団体がいて、ある関係性ができ上がっています。

そこには、ある時代にでき上がった活動のスタイル、或いはその基盤みたいなものがあるが、それが時代の変化につれて、変わらなくてはいけない部分がありますが、なかなか変わり切らずに問題を抱えていて、その先に進めないみたいなことがあります。

それは団体同士の間でもありますし、個々の団体でもあるのだらうと思います。

そこでワークショップにより、日頃抱えている、その関係性を1回ちょっとガラガラポンし、改めて、そのメンバーたちそれぞれの可能性をとらえ直し、次のステップに向かっていく必要がでてきたためなのではないかと思います。

要は、創造活動部門や交流部門のプログラムを考えていく人たちが、その地元の活動団体の人たちとは少し違ったノウハウを持ち、少し違った視点から、大命題に向けて、プログラムを組織していくというような視点が必要かなと思います。

単純に言ってしまうと、外部の専門性を導入するというところですが、その地元にある財産を施設の中に取り入れながらといった単純な足し算だけだと、やはり上手いかなにかと思っています。

○伊藤委員

建てるという立場から言うと、ワークショップをさせていろいろな方々の意見を集めるのは非常に重要なことです。

ただ、出てくる意見というのは本当に皆さんの夢が膨らみ、どんどん大きくなるだけです。

設計する立場からすると、敷地の条件、お金の条件、色々な社会的な現実の中で物を形にしていかななくてはいけない。そこには、法規なども関係してきます。

しかし、そういう皆さんの夢を壊さないように、出てきた意見をどうやって集約してまとめるかが一番問題であり、それはやはり最終的には行政の方などが、市の一つのビジョンの中に収めていかななくてはいけないと思います。

予算だとかそういうことも含めてですね、それをやっていくのが行政の方々の手腕であり責任であると考えます。

私どもの作る立場としては、そういう中で最終的な落としどころを考えていかななくてはならないということだと思います。

なので、市民の方々の意見をできるだけ広く集めて、皆さんが満足するものを作ることが大事なのは重々わかるのですが、それは最も難しいことだということも認識しながら、今後の作業を進めていく必要があると思います。

○宮崎委員

私はしっかりした中ホールを作って欲しいと思います。

それは、やはり、いいものを聴きたいとかいいものを観たいとかいう人はいるわけですし。

送っていただいた資料を見て、市民会館に大ホールが必要ないというアンケート調査が50パーセントを越えていると言うのはショックだったのですが、やはり、いいものを観たい、聴きたい人が半分はいる訳ですので、しっかりとした木更津の中規模ホールを造って欲しいと思います。

多目的ホールは色々なことに使えるようなことにして欲しいですし、そこはみんなが日常的に活動できるようにしてもらえたらと私は考えております。

○倉田委員長

進行役としては、少し時間が気になっており、この議論というのは、本当はもう少しの方がいいというふうには思っているのですが、もうすでに2時間を超えているという状況です。

事務局にお伺いしますが、この議論というのは結構大事なところだと思いますので、例えば、もう少し次回、この議論を継続して行うというのはいかがでしょうか。

私自身としては、このハードの部分、具体的にどのスペースがどれくらいいるというのを決めるのは意外と簡単に決められるのかなと思っています。

しかしながら、私としては、この施設をどういうふうにご利用するかというところから議論しないと

一番まずいのではないかと考えます。

結局、それはただの箱で終わってしまうっていうのはよくあるケースで、やはりここでは、その利用の視点から、誰がどういう形で利用するのか、先ほども少し議論が出ていましたが、例えばホール一つとってみても、ある意味で貸し館的な利用っていうのもあり、また自主事業というのものもあると思います。

或いは自主事業までいかない、本当に市民の発表の場だとかというような位置付けもあると思いますので、いずれかによって、おそらくかなりホールの性格というのも変わってくるのではないかなと思います。

また、それは同時に運営とも関係してくると思います。

先ほどワークショップの話も出ましたが、私自身の限られた経験ではありますが、いくつかホールと関係した施設のワークショップというのをお手伝いしてきていますが、例えば、私関わった茅野市民館というところだと、このワークショップが、将来の運営に関わってくる市民が育つ場でもあって、実際にそのワークショップに参加した市民の方たちが、NPOを作り、管理運営にも関わり、自主事業も年に何回かやっていくというところにまで繋がっていきました。

ですから、そういう意味で、やはり運営やその利用といったものも含め、一体で議論しないと、本当に必要とされているホールの姿が見えてこないのではないかという気がします。

なので、もう少しこの議論が必要ではないかと思います。

施設の構成をまとめるのは、プロもいらっしゃるので意外と簡単にできますが、それ以前のところが非常に大事ではないかという気がしました。

ということで、もう少しこの議論をして、施設の構成などにいったほうがいいのではないかというふうに思いますが、事務局はいかがですか。

○事務局

第2回のワークショップを、ホールの構成を考えようというテーマで、8月21日に行い、それを踏まえて、第3回委員会を10月上旬に行う予定でしたが、委員長がおっしゃられたような議論の重要性、また松井委員よりいただいた事例提案などを踏まえ、9月中旬頃の開催について、委託しているシアターワークショップさんと協議させていただいて、また委員の皆さんに開催のご連絡をさせていただきたいと思います。

○倉田委員長

そういうことでよろしいでしょうか。

次回、もう少し継続して議論いただきたいと思いますが、本日あと一つ議題が残っており、既存中ホールについてということですが、少し説明していただいでよろしいですか。

○シアターワークショップ佐藤氏

【資料に基づき「議題4 既存中ホールについて」を説明】

○倉田委員長

ありがとうございます。

ただいまの説明は、中ホールを改修してでも継続利用するのか、あるいは、もうこの機会に中ホールの利用はしないのかの判断材料だというふうに理解してよろしいですね。

伺ったところ、施設設備の点も含め、かなり厳しいだろうかと思いますが、ここでは、具体的に皆さんのご意見で結論づけてしまうということでもよろしいのですか。

○事務局

今回の会議ではなく、次回以降もう一度ご議論いただいでというような形をお願いします。

今後、施設の規模、敷地の候補地、複合化をご議論いただく予定になっておりますので、その中で中ホールの方向性について、合わせてご検討いただければというふうに考えております。

○倉田委員長

それでは、本日は、中ホールについて、もう少し詳細に調べていただいた情報を皆さんにご提供するということであると理解してよろしいですね。

では、時間もかなり経ってしまいましたので、以上で本日の議事を終了させていただきたいと思えます。

では、議長の任務を解かせていただきます。

ご協力ありがとうございました。

○司会

倉田委員長ありがとうございました。

委員の皆様方におかれましても、長時間のご審議、ありがとうございました。

最後になりますが、その他といたしまして、次回の案内と、事務局の方から説明をお願いします。

○事務局

今年度スケジュールとして前回配らせていただいたものでは、次回第3回の予定を10月9日水曜日にしておりましたが、もう少し施設機能や施設構成について色々検討していかなければならないところもありますので、次回は9月の開催で調整を図らせていただきたいと思います。

開催案内については、別途送付させていただきますので、よろしく願いいたします。

○司会

以上をもちまして第2回木更津市市民会館整備検討委員会を終了させていただきます。

本日はありがとうございました。

上記会議録を証するため下記署名する。

令和元年 8月28日

木更津市市民会館整備検討委員会委員長 倉田 直道